SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

中学校英語科におけるアウトプット力育成のための授業づくり：リアル化を意識したタスクの有効性に焦点をあてて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 史江 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024840

中学校英語科におけるアウトプット力育成のための授業づくり

――リアル化を意識したタスクの有効性に焦点をあてて――

石川　史江

Designing English Lessons Focusing on Positive Effectiveness of Realistic Tasks for Development of Speaking and Writing Skills in Junior High School

Fumie ISHIKAWA

１．問題の所在

1-1 英語教育の変革期にある今日的課題より

2017 年 3 月に 2020 年度から順次実施される次期学習指導要領が告示された。今回の改訂により、各教科・領域等において資質・能力の育成を図るため、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が強く打ち出されている。また、外国語科では、小学校外国語活動の開始を従来の 5・6 年から中学年に移行させ、高学年においては正式な教科として実施することとなった。これに伴い、指導者の配置、職員の研修推進等、完全実施前に多くの問題点を解消させるべく、各市町村教育委員会を中心にその対応に追われている。

一方、中学校においては小学校での英語の教科化を受け、小学校段階ですでに英語の 4 技能に関する学習を経て入学してくる生徒をどう迎え入れ、育てていくのかという点について今後検討していく必要性に迫られている。国際共通語である英語を使って、世界中の人々と協働しながら主体的に課題解決を図れるだけの英語力を身に付けさせようと、特に発信力（アウトプット力）の強化が一層求められている。しかし、国をあげて英語教育の抜本的強化を推し進めている一方で、実際の中学校現場においては、学年があがるにつれて英語学習への肯定的意識は下降の一途をたどる傾向がある。平成 28 年度英語力調査（文部科学省）の質問紙調査の結果では「英語の学習が好きではない」と答えた生徒の割合が 45.4%（対前年 2.2 ポイント増加）であった。また、ベネッセが実施した「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」では、急速に進むグローバル化など社会におけるさまざまな変化から、将来の社会における英語の必要性は痛切に感じている生徒は多いものの、自分の将来における英語の必要性を問われると、44.2%の生徒が「英語を使うことはほぼない」と回答している。今回の学習指導要領改訂により、学校教育に位置づけられる英語学習の開始年齢はさらに引き下げられる。英語学習への意欲の低下を回避しつつ、英語力の向上を図っていくためには、英語科教員の授業改善の意識が今後一層求められる。

1-2　アウトプット力を高めるコミュニケーション活動の必要性

新しい言語材料を学習しても、活用が意味に依存し、実際に学習した言語材料が使える場面や状況に遭遇しても、活用を引き出せない生徒の実態に課題意識を抱くのは、英語科教員の共通するところでもある。次期学習指導要領では、コミュニケーション場面における思考力等の育成が一層強く求められている。実際のコミュニケーション場面、目的、状況に応じ、思考力・判断力・表現力を働かせたアウトプットを実行できる力を育成するには、授業におけるコミュニケーション活動（タスク）をどうデザインするかが重要になる。

２．研究の目的

本研究の目的は、中学校英語科の授業におけるコミュニケーション活動の中心に位置づけるタ

スクをよりリアルなものにすることで、まずは英語学習に関する情意面の向上を目指すことである。タスクの内容を生徒にとって実社会とのつながりをもたせたリアル感のあるもので実践することを通して、コミュニケーション活動の必然性を高め、意欲の向上を促し、場面や状況から活用を引き出せるようなアウトプット力を育成するための授業づくりについて検証する。タスクに実社会とのつながりをもたせることで、生徒の興味・関心が高まり、本研究における実践のような授業実践の積み重ねが、やがては生徒の英語の有用感を高め、英語の習得意欲をかき立て、生涯にわたって英語を学び続けることへの肯定的意識をもたせる布石となると推察する。

3．研究の方法

A市立B中学校1年生C組 D組 E組（計92名）を対象に、課末のまとめの言語活動として、SpeakingおよびWritingを中心に据えた複数技能統合型授業を実施した。実践授業は7月（実践研究1）と10月（実践研究2）の2回にわたり行った。「タスクのリアル化」を表1のように定義し、3つの要件を多く満たすタスクを取り入れた単元計画を、教職経験2年目の教科担任F教諭と作成し、協働で実践を行った。

表1 本研究における「タスクのリアル化」定義（要件）

①生徒自身が心からコミュニケーションを図りたいと思えるような実在する人物をコミュニケーションの活動の発信先に据えたり、生徒の実生活において必要感ある情報を教室内の言語活動に盛り込んだりすることで、臨場感を高める。 ・・・コミュニケーションのリアル化
②生徒の実生活において経験することのある行事や活動などをコミュニケーション活動の中で再現し、実際の場面で実現化を図る。 ・・・活動・場面のリアル化
③実際の場面を生徒が想起しやすくするために、ＩＣＴ等を活用したり、映像・画像等をワークシートや授業の中の活動に盛り込んだりして、リアル感を生徒が認識できるような創意工夫を施す。 ・・・イメージや場のリアル化

3-1 実践研究1

3-1-1 実践研究1の方法

実践研究 1 では、「話すこと〔発表〕」と生徒の苦手意識の強い「書くこと」を中心に据えた単元デザインを行い、実践した。リアル化を意識したタスクの有効性を、質問紙調査の結果から情意面の変容を分析した上で、Pre-Test/Post-Test におけるアウトプット（Speaking・Writing）力の変化をデータ化し分析した。

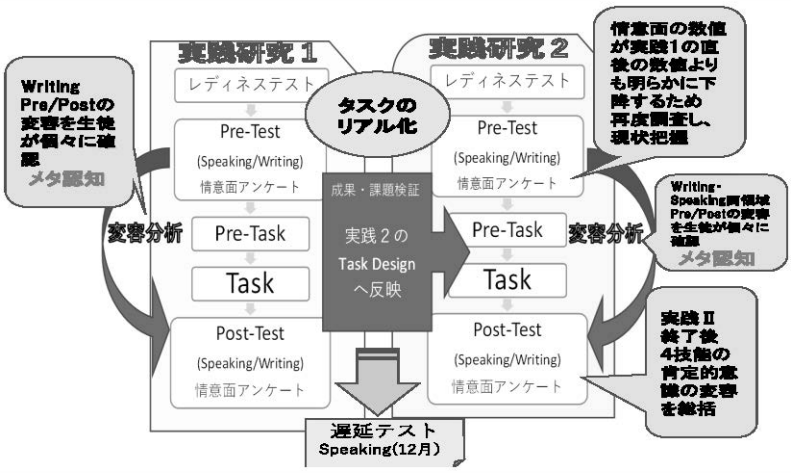

図1　本研究の流れ

事前事後の質問紙調査は、平成28年度英語力調査や「中高生の英語学習に関する実態調査2014」の質問紙項目を参考に作成した。主な質問事項は、①英語への肯定的意識 ②英語得意・苦手 ③授業の対話活動への意欲 ④言語活動の内容と実社会とのつながり（タスクのリアル感） ⑤教室外での英語活用に対する意欲 ⑥将来の社会における英語の必要性 ⑦将来の自分にとっての英語の必要性 ⑧授業内容の理解度 ⑨4技能への肯定的意識の項目を中心にデータをとり、情意面の変化を分析した。なお、質問紙調査は実践1・2共通で同一のものを使用した。

技能面については、Pre/Post-Test として、Speaking では「40 秒間で自己紹介しよう」を実施し、それぞれ語彙数・文数・使用した動詞の種類・接続詞の活用回数を計測し、事前事後で変容を分析した。Writing においても「5 分間で自己紹介文を書いてみよう」を実施し Speaking 同様に語彙数・文数・動詞の種類・接続詞の活用回数を計測し、結果を検証した。また、定期テストの結果をもとに上位・中位・下位の習熟度別に 8 名ずつ生徒を抽出し、Speaking・Writing の両面における Pre/Post の変化を検証した。また、実践を省察するなかで、実践研究 2 につなげる実践上の課題を明らかにした。図 1 は本研究の流れを図式化したものである。

3-1-2 実践研究 1 の概要 “Chapter 1 Project 自分のことを伝えよう” 7 月実施

タスクのリアル化の 3 つの定義のうち①・③の 2 つの要件を満たしたタスクをデザインした。章のまとめの言語活動に相当する単元として、教科書の言語活動を大幅にリデザインする形で実施した。単元に入る前に実施した実態調査から浮かび上がった課題を意識し、Task に入る準備段階として基礎の定着を図る Pre-Task を実施した後、Task の達成に必要な基礎の定着を確認した後で Task を実践する、計 6 時間で本単元を実践した。

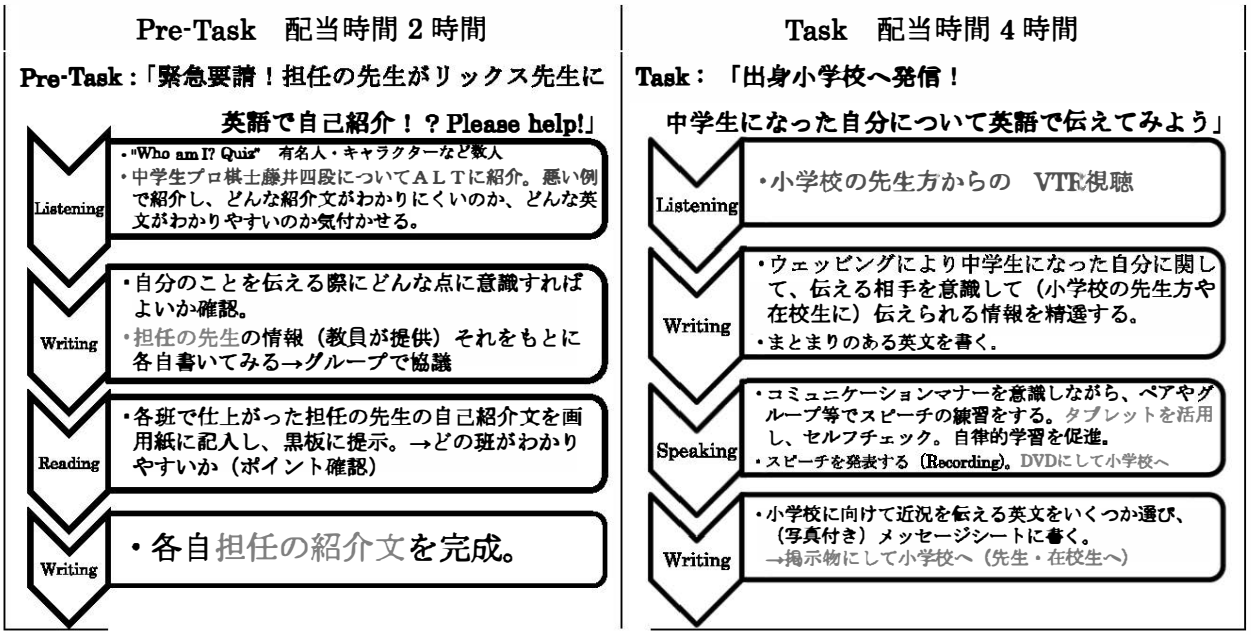

図 2 実践研究 1 タスクデザイン

3-2 実践研究 2

3-2-1 実践研究 2 の方法

実践研究 2 では、実践研究 1 から見えた課題の解決を図りつつ、「書くこと」および「話すこと〔やりとり〕」を中心に据え、主に対話力の基礎を育成することを狙った。実践研究 1 に引き続き、タスクのリアル化を反映させた単元計画を作成し、アウトプット力の向上のため、実態把握から解決すべき課題として「三人称単数現在形を学習したことによる文法知識の混乱を解消させ、適切な問答を定着させる」「1 問 1 答式の対話からさらに 1 文付け加えて返答することで対話を広げるスキルを身に付けさせる」ことを意図して実践を行った。質問紙調査は実践研究 1 と同様のものを使用し、タスクの有効性をまずは情意面で変容を確認した上で、アウトプット力の変容をデータ化した。

Speaking の Pre/Post では、他者紹介のプレゼンを行い、その後で QA のやりとりを行った。QA のやりとりに関しては、他者紹介とその人物に関する質問 Q1～Q3 までの 3 問に対する回答をデータ化し、比較・分析した。他者紹介については、教科担任の F 先生に関してある程度の情報量を含んだプロフィールカードを生徒に渡し、1 分程度黙読させた後 30 秒で、即興で紹介させた。その後、Be 動詞の疑問文・does の疑問文・Wh-疑問文の合計 3 問質問し、2 文以上で返答できるかを評価した。このやりとりを評価する指標として先行研究を調べた結果、小泉ら(2003)による、タスクの実践研究で使用されていた尺度を参考に独自のものを考案して評価した。

3-2-2 実践研究 2 の概要　"Lesson 5 Ms.Allen's Family まとめの言語活動"　10 月実施

タスクのリアル化の 3 つの要件のうちすべてを網羅したタスクを実施した。Pre-Task では様々な疑問文に対する適切な答え方の定着を図り、さらに 1 文付け加えて返すことを反復練習できるような授業デザインで実施し、その後 Task に移行した。

4．研究結果

4-1 実践研究 1　質問紙調査の結果

タスクが実社会とのつながりを感じたかどうかを問う項目の結果は、74%から 89%までに肯定的回答率が上昇していた。実在する人物であり、なおかつ生徒たちが心からコミュニケーションをとりたいと思えるような人物をコミュニケーション活動の発信先に据えた（タスクのリアル化①）ことで、コミュニケーション活動（タスク）の必然性は高まった。これにより、意欲的に取り組む生徒が増え、図 3 にもあるように、全体的には 4 技能に対する肯定的意識は高まっていると考えられる。また、Writing に関しては、単元の振り返りの時間に、生徒が各自で Pre/Post-Test の英作文を比較して、それぞれの学びの変容を確認する場を設定した。成果をメタ認知できたことが自信につながり、Writing に対する肯定的意識は、実践後の 58%から 83%まで上昇した。しかし、Speaking への肯定的意識は想定していた以上に上がらなかった。

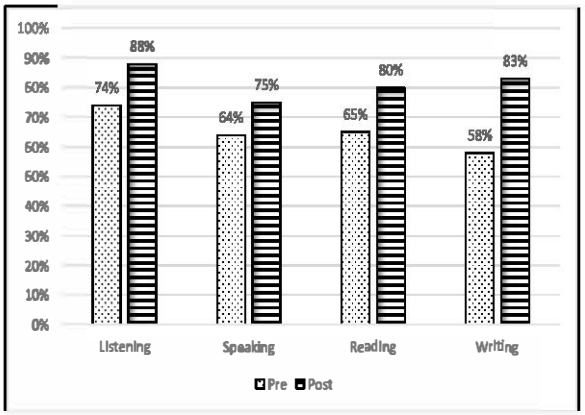

図 3 4 技能に対する肯定的意識の変化

4-2　実践研究 1　アウトプットの変容

Speaking および Writing に関しての Pre/Post-Test の結果は右のようになった。Speaking･Writing ともにどの項目も総体的に伸びている。主に Writing における動詞の種類については、but や so を使用しながら前後の文の関連性を意識して書くようになったことで、同一の動詞を活用することが増えたことが要因として考えられる。実践研究 2 により、アウトプット力の伸長が認められる。

表 2 Speaking　Pre/Post 結果

項目	Pre-Test (n=84)		Post-Test(n=84)		テスト間の t 検定
	平均値	S.D.	平均値	S.D.	
語数	19.58	5.50	29.79	8.54	$t(83)= 12.40$***
動詞の種類	3.99	0.97	3.86	1.19	$t(83)= -0.96$
文数	5.83	1.63	7.45	1.91	$t(83)= 8.26$***
接続詞の使用回数	0.18	1.00	1.44	1.14	$t(83)= 7.60$***
否定文の使用回数	0.37	1.06	1.00	0.79	$t(83)= 4.55$***

***p<.001

4-3 実践研究 2 につなげる課題点

タスクのリアル化を図ったことにより、情意面についても技能面についても、ともに向上が見られた。しかし、技能面の伸び率を見てみると、Writing よりも Speaking の方が伸び率は高いが、肯定的意識に関しては Speaking よりも Writing の方が高く、Speaking への肯定的意識がスムーズに向上していかない実態には課題意識が残った。その要因として、1 点目は Writing については行った Pre/Post の自己の変容の振り返りを確認できる機会を Speaking では設けられなかったこと、2 点目は、本実践のタスクが話すこと（発表型）を扱ったものであり、伝わったかどうかのリスポンスがなく、実際にコミュニケーションの達成を実感できる場がなかったこと、3 点目は十分な練習時間が確保しきれなかった点であると考察し、実践研究 2 へつなげる課題と位置付けた。

表 3　Writing Pre/Post　結果

項目	Pre-Test (n=86)		Post-Test(n=86)		テスト間の t 検定
	平均値	*S.D.*	平均値	*S.D.*	
語数	25.63	10.37	34.30	11.91	$t(85)=$ 8.00***
動詞の種類	4.91	1.39	4.65	1.48	$t(85)=$ -1.34
文数	7.34	2.76	8.59	2.78	$t(85)=$ 4.33***
接続詞の使用回数	0.28	0.54	2.09	1.35	$t(85)=$ 13.24***
否定文の使用回数	0.62	0.85	1.19	0.86	$t(85)=$ 5.86***

***p<.001

4-4 実践研究 2　質問紙調査の結果

「言語活動に実社会とのつながりを感じた」と答えていた生徒の割合は 86%であったのが Post では 92%にまで上昇し、タスクのリアル化は実感として機能していたと捉えられる。また活動へ向かう意欲もリアル感をもたせることを追求することにより、コミュニケーション活動に必然性が生まれ Post では 93%の生徒が「授業が楽しい」感じると答えていた。図 4 のように課題としていた Speaking の肯定的意識は他の 3 技能と同じ程度までに上昇した。

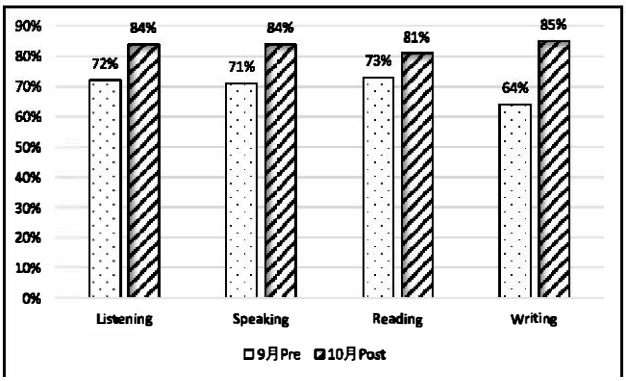

図 4　4 技能への肯定的意識の変化

4-5 実践研究 2　アウトプットの結果

生徒が話した紹介文の語数 Pre/Post で比較すると 0.1%水準で平均点に有意差が見られた（$t(83)=9.04, p<.001$）。文数においては 5%水準で有意な差が見られた（$t(83)=2.07, p<.05$）。他者紹介における総文数は確かに若干の増加傾向は見られたが、30 秒という時間制限の中では文単位での大幅な増加を見込むことは難しかったと考えられる。しかし、正確な文数の項目においては、0.1%水準で平均の差は有意に高まっていることがわかる（$t(83)=5.61, p<.001$）。また、QA に関しても Q1～Q3 までいずれも、0.1%水準で平均点に有意差が見られた。Be 動詞や Wh-疑問

表 4 他者紹介プレゼン　Pre/Post　結果

項目	Pre-Test (n=84)		Post-Test(n=84)		テスト間の t 検定
	平均値	*S.D.*	平均値	*S.D.*	
紹介文の語数	21.05	7.21	27.06	7.91	$t(83)=$ 9.04***
紹介文の文数	6.27	4.40	7.18	1.99	$t(83)=$ 2.07*
正確な文数	3.63	2.23	4.79	2.15	$t(83)=$ 5.61***
正確な三単現	2.95	2.01	3.57	2.10	$t(83)=$ 3.24***
接続詞の使用回数	0.58	1.07	0.62	0.82	$t(83)=$ 0.30

*p<.05, ***p<.001

表 5 QA　やり取り　Pre/Post　結果

項目	Pre-Test (n=84)		Post-Test(n=84)		テスト間の t 検定
	平均値	*S.D.*	平均値	*S.D.*	
Q1	2.93	0.96	3.67	1.11	$t(83)=$ 5.40***
Q2	2.80	1.33	4.48	0.95	$t(83)=$ 10.26***
Q3	2.62	1.43	4.11	1.15	$t(83)=$ 8.63***

***p<.001

文など各種の疑問文に対し適切にかつ文で＋1 返答できる生徒が増えた。Writing についても、すべての項目において、Pre/Post の平均の差は 0.1%水準で有意に高まっていた。正確さに関しても、英文数・正確な三単現の数ともに向上しており、アウトプット力の育成につながっていると捉えられる。

５．総合考察

実践を通して､2 つの技能に対する肯定的意識の変容は緩やかな斜め N 字型に推移している。実践研究 1 の Pre から Post にかけて、数値は上昇するが､時間が経過し､再び実践研究 2 の Pre では数値が下がっている。しかし、その数値は両技能とも、実践研究 1 の Pre の数値を下回ってはいない。このことから､本研究におけるような実践を積み重ねていけば、少しずつ生徒の意識を向上させることができると考察できる。

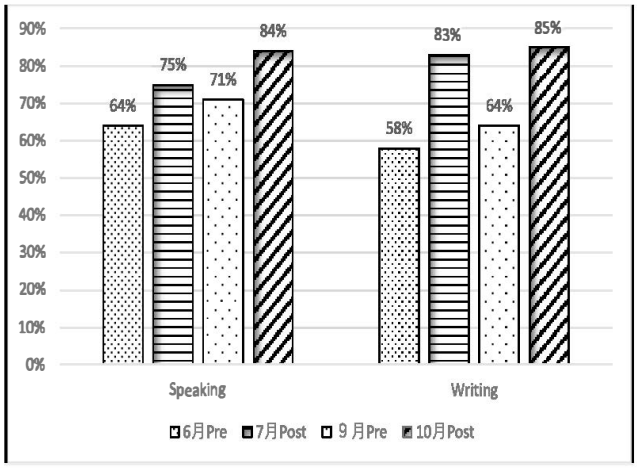

図５ 本研究における２技能の肯定的意識の推移

また、本研究の成果として、実践を行った２か月後に Chapter 2 Project のパフォーマンス課題で他者紹介のプレゼンを行った。その際、プレゼン後、ALT が QA の遅延テストを行った結果 78%の生徒が＋１文を意識して返答ができていた。プレゼンにおいても、関連性を意識した紹介ができており、本実践の成果が感じられる内容になっていた。また、以前は「正確な英語を話さなければならない」という意識が強く、自信のなさからアウトプットに苦手意識のあった生徒が、「伝わればよい」と実際のコミュニケーションの場で実感できたことにより、情意面の向上が見られた。この実感もまた、リアルなコミュニケーションの場でこそ感じられるものである。

英語教育の抜本的強化を図ろうとする中で、国が指摘する「意欲面の課題」に対する授業改善の糸口としても、また、アウトプット力の向上においても、タスクのリアル化は大いに有効である。また、本研究においては、小中の接続も視野にいれ、リアル化を実現させるために小学校とのつながりをタスクに生かした。学校間の接続も活用の仕方で大きく教室内の言語活動を有機化できる要素になる。今後は、本研究の成果をもとに小学校の英語教育の現場と中学校現場とつなげられるようなカリキュラム作成の一助になれたらと考える。これから時代はまだまだ大きく変わっていく。だからこそ、社会に目を向け、英語を指導することの意義を自らに問い続けるとともに、その魅力を伝え続けられるような授業づくりを目指さなければならない。今後も研究を重ね、本実践のような授業改善を積み重ねていくことが、やがては生涯にわたっての英語の有用感を感じられるような生徒の育成につながることを実証していくことを目指したい。

＊参考文献

松村昌紀(2017)『タスク・ベースの英語指導―TBLT の理解と実践―』大修館書店
文部科学省(2017)『平成 28 年度英語教育改善のための英語力調査(中学校)報告書』
ベネッセ総合教育研究所(2014)「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」
小泉利恵・山内逸美(2003)「日本人中学生のスピーキング能力の発達　自己紹介のタスクを用いて」関東甲信越英語教育学会研究紀要 (17), 33-44,